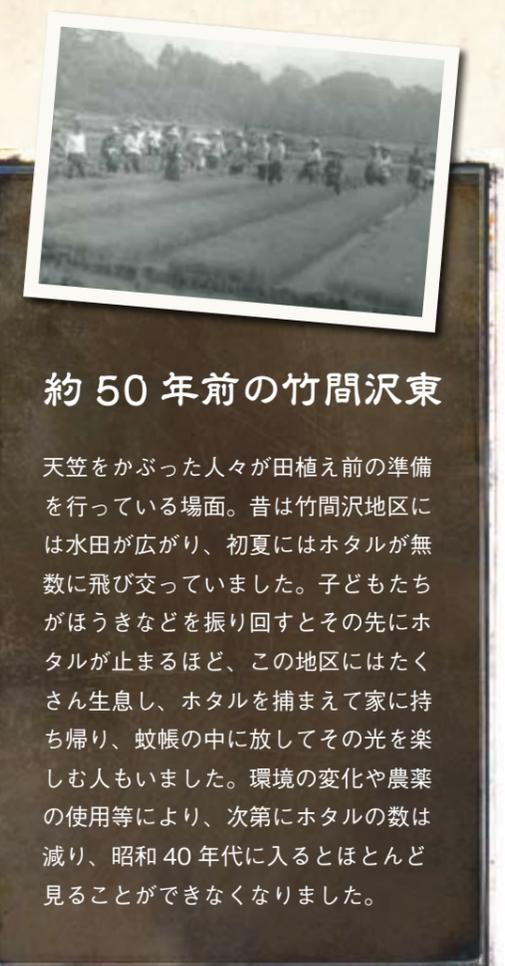


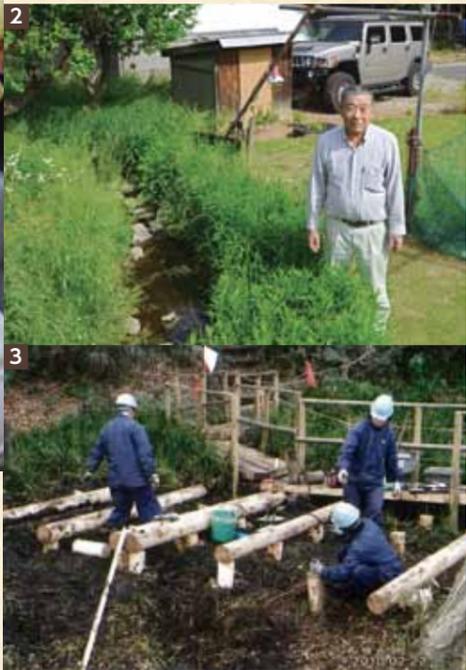


1 こぶしの里での竹間沢小学校児童によるホタルの幼虫放流体験の様子。放流の前にホタルの生態についても説明します。学校でも事前にホタルについて勉強しています。
2 池上正信さん宅のビオトープ。今ではこの中でカワニナが育ち、野生のホタルを見ることができるようになりました。
3 こぶしの里の橋は育成会が関わり作られたもの。
4 竹間沢ほたる育成会の皆さん。発足時は12人で現在は32人。観賞時は周辺パトロールや、駐車場の誘導等を行うほか、定期的にかぶしの里の清掃や環境保全を行い、きれいな環境を維持するために日々活動をしています。



約50年前の竹間沢東

天笠をかぶった人々が田植え前の準備を行っている場面。昔は竹間沢地区には水田が広がり、初夏にはホタルが無数に飛び交っていました。子どもたちがぼうきなどを振り回すとその先にホタルが止まるほど、この地区にはたくさん生息し、ホタルを捕まえて家に持ち帰り、蚊帳の中に放してその光を楽しむ人もいました。環境の変化や農薬の使用等により、次第にホタルの数は減り、昭和40年代に入るとほとんど見るができなくなりました。



4
「昨年放流したカワニナが生き残り、ホタルの幼虫も自然に孵化したようです。将来、放流をしなくても、野生のホタルがこぶしの里を舞う姿を見ることができるようになります。」と古寺会長は言います。
ホタルの光に
想いをのせて……
竹間沢ほたる育成会の皆さんの「ずっと、ずっとふるさと三芳町にホタルの光を」との想いをのせて、ホタルたちは今年も私たちに、こぶしの里で美しい光を見せてくれることでしょう。

竹間沢ほたる育成会長

古寺 貞之さん

会長としてほたる育成会の活動に精力的に取り組んでいる。下の写真は古寺さんが小さい頃の自宅周辺と第二分校卒業式の様子。当時は初夏にホタルが見られることは当たり前だった。



ずっと、ずっと。 ホタルの光を届けたい

こぶしの里の清掃や環境保全を行っている竹間沢ほたる育成会の皆さん。ホタル舞う光景が見たい、その強い想いのおかげで私たちはホタルの光を楽しめるのです。

ホタル舞う光景を
後世に残したい

昭和30年代の竹間沢地区には水田が広がり、夏の始めには多くのホタルが美しい光景を見せていました。「昔は当たり前のようにホタルがいたのに、今は姿が見えなくなっています。自分たちが幼い頃に見た光景を見せてあげたいという話で盛り上がり、またホタルの光を三芳町に灯すため、仲間と協力し、平成14年に竹間沢ほたる育成会を結成しました。」と話してくれた竹間沢ほたる育成会会長の古寺さん。

— ホタルを育てるには
— どうしたらよいか —
育成会の皆さんは、手探りの中、ホタルについて学ぶため、ホタル観賞を行っている全国各所を視察しました。自然の中で舞うホタルよりもビニールハウス内で飼育されるホタルが多い中「子どもの頃に見たように屋根のない、自然の中でホタルが自由に舞う姿が見たい」と決意した皆さん。ここから屋外の自然環境下でホタルを育成するために、様々な試みを始めました。
まず、会員のひとり、池上正信さ

んが自宅の庭に簡易な池（ビオトープ）を作り、ホタルの幼虫を放したところ、無事に成長することが確認できました。こぶしの里の湧き水と池上さん宅のビオトープの水質を検査したところ、大きな違いがなく、こぶしの里の湧き水でホタルが生きられることが分かりました。
— こぶしの里でホタルの光を見られるかもしれない —
その想いを胸に初年度は、こぶしの里に流れる「こぶしの川」でホタルの幼虫とエサとなるカワニナを放流しました。しかし、川に生息するザリガニによって食べられ、全滅してしまいました。こうした苦い経験から、ザリガニやサワガニがあまりいない場所を探し、放流場所を変えるなど試行錯誤を繰り返して、今年こそぶしの里内の一番奥に放流を行いました。

未来への明るい光が 現実になってきた

そして今年の3月。ホタルの幼虫を放流するために、こぶしの里を訪れた育成会の皆さんは驚きの光景を目にしました。まだ今年のホタルの幼虫もカワニナも放流していないのに、ホタルの幼虫がカワニナを食べ